

Historians' workshop 英文校閲ワークショップ (ベータ版) 第一回

2017年10月3日 午後7時-
東京大学本郷キャンパス小島ホール2階 第3セミナー室
テーマ "Actions"

本日のプログラム

1. Ice breaking + 参加者の課題・ゴールの洗い出し (1 to 1)
2. 教科書の関連ページについて、要点の確認
3. Williams *Style* 所収の練習問題(3.4; 3.12)を実際にやってみる
..10min break..
4. 応用として自分の分野の論文要旨 and/or 自分の書いたドラフトをサンプルにしてリバイズなどをやってみる
5. Q&A・速度確認 次回以降やってみたいことを話し合う

コーディネーター紹介

山本浩司 東京大学経済学研究科 講師(テニユア・トラック)

2003 慶応大学法学部卒
学部時代までの海外長期滞在経験はケンブリッジでのサマースクール1ヶ月
2003-9 学部卒業後、6年間英ヨーク大学へ留学
2009-16 イギリス(とフランス)でポスドク
2016 1月帰国、4月より現職

帰国子女ではない。もともと語学は苦手(学部1年の英語クラスは下から二番目のレベル、成績C)。

→それでも英語ライティングの習熟はある程度可能。

校閲業者を頼んだのは博士論文序論を読んでもらった際の一度のみ。友人・同僚に頼み込んだ(!)

投稿経験:

2009 (PD1年目) *English Historical Review* (accepted subject to minor revision)

2011 (PD3年目) *Historical Journal* (accepted subject to minor revision)

2013 (PD5年目) *British Journal for the History of Science* (revise&resubmit ==> accepted)

査読経験: *Historical Journal*; *Journal of British Studies*; *Technology and Culture*; *Memory Studies* その他欧米助成機関3か所

知っておきたかったこと

- Microsoft Word や電子辞書ソーラスの類義語検索はあまり信頼しすぎない
- (既によく知っている用法を思い出す程度になら、使える)
- 初稿のレベルは低くても構わない。重要なのはリバイズし続けること。
- 辞書類・ガイド等は一式手元にそろえ、リバイズの時に重点的に使うこと。
- 写経がライティングの向上に役に立つこと。
- 同僚(や後輩)の文章にコメントをするのもスキルアップへの近道
- 日頃のネットワーク作りが、推敲時に役立つ。(自分がどうしてもネイティブに原稿を読んでほしい、表現も細かくチェックしてほしいと思った時に、助け舟を出してくれる人を自分のネットワークに引き入れることはできているか。) ==> 戦略的 Networking という別テーマへ

ただ英語圏で時間を過ごせばいい、という問題でもない。校閲業者に見せれば all ok とは言えない。(お金で解決できないエリアもある)→日々の工夫と実践でカバーできるはず。

Koji Yamamoto, "Revising for publication as a non-native speaker"
3 October 2017

George Orwell, 'Politics and the English Language' 一部抜粋

"I am going to translate a passage of good English into modern English of the worst sort. Here is a well-known verse from Ecclesiastes:

I returned and saw under the sun, that the race is not to the swift, nor the battle to the strong, neither yet bread to the wise, nor yet riches to men of understanding, nor yet favour to men of skill; but time and chance happeneth to them all.

Here it is in modern English:

Objective considerations of contemporary phenomena compel the conclusion that success or failure in competitive activities exhibits no tendency to be commensurate with innate capacity, but that a considerable element of the unpredictable must invariably be taken into account.

This is a parody, but not a very gross one."